

## 回想文

# 知縁のセレンディピティ

安藤 徹

たとえば、名古屋大学に高橋亨がいなかったとする。さて、私は『源氏物語』を研究していたらどうか。研究者になり、大学教員となることができただろうか。……ふとそんな思いがよぎるのは、高橋先生との偶然の、しかし決定的な出会いの重さを痛感するからである。

むろん（失礼！）、私は先生がいたから名大を受験したわけではない（存在さえ知らなかったのだから）。ただ、自分の学力と家計の現実と将来の希望とを綯い交ぜにして大学を選択したというばかりだ。教員はすでにそこにいた。偶然というほかない。

私が入学したのは一九八六年。たまたま田辺聖子『新源氏物語』を読んでいたからか、国文学専攻に進むことを希望していたからだだったか、「あの授業は楽勝！」という快？情報を聞いたからだだったか、ともかく特段古典が好きなわけでも得意なわけでもなかった私が大学ではじめて学んだ日本文学の授業が、（まだ三〇代だった）

高橋先生の『源氏物語』の授業だった。テキストは『源氏物語の対位法』。正直なところ、チンプンカンプンだったけれども、かすかな記憶によれば、講義の中心（正確には先生の関心の中心）はテキストに書かれてあることではなく、ちょうどそのころから提唱しはじめた「心的遠近法」にあったようだから（ヒドイ話ではある）、さぼり気味の私が難解なテキストをわずかな頼りに授業を理解しようとしても無理だったことになる。私の成績は推して知るべし。

その後、先生の研究の支柱へと成長することになる「心的遠近法」の生まれたての湯気に触れていたのだと思うと（後悔も含めて）感慨深い。数年後に「心的遠近法」を含む研究成果を収めた『物語と絵の遠近法』が刊行された際に本誌に掲載された書評が、私が書いたはじめての書評というのも、奇縁ではある。

四年生になる年の春、私は卒業論文の対象に『源氏物

語」を選んだ。当然、高橋先生から学ぶべきことはたくさんある。しかし、残念ながら当時は四年生が受講できる先生の授業はなかったので、親しい先輩（院生）たちが出ている大学院の授業に潜らせてもらおうと考え、でも一人では怖くて、同じく『源氏物語』を卒論で取り上げるという同級生の佐藤淳子さんといっしょにだったと思うが、会議後の先生を待ち伏せして許可を得たのだった。こうして、院生と議論する先生を直接目にするようになる。

いまでも変わることのない先生の印象といえ、とにかく楽しくてしかたがないといった感じで話す姿である。こんなにも素直に、いやもしかするときわめて教育的配慮に基づいてか（ちがうか）、とにかくまずは徹底的に自分自身が楽しんでる姿を私たちに見せつけてきた。とくに大学院の授業のように濃密な議論の場だと、知的興味を刺激された先生がウキウキ、ワクワクしながら、溢れ出るインテリジェンスに身を任せてホットに語るさまがストレートに伝わってきたものだった。卒業後、私が大学院に進学したのは、教員採用試験に落ちた結果ではあるけれども、先生と先輩院生たちが遠慮なく知的論戦を繰り広げ、研究の面白さ（と厳しさ）を満喫している姿にあこがれたからでもあったろう。研究の世界が輝

いて見えたのである。私も思わずワクワクしたのである。進学後、はじめて私が参加した学外の研究会は「古代文学研究会（古代研）」だった。きっかけは先生の「今度、鳥羽で合宿があるけど、参加してみる？」という誘いだった。一九九〇年六月一六日、近鉄特急の隣の座席には高橋先生。弁当・ビールをご馳走になりながら、さでどんな話をしたのか、ほとんど覚えていない（話題に困ってであろう、「安藤くんは安藤為章となにか関係でもあるの？」とふられたことだけは鮮明に甦る。いかにも不自然な問いかけだけに、ありがたい思い出なのだ）。ともかく、いかにして私は研究の世界へと踏み出したか、そのことを象徴的に物語る出来事としてある。

いや、単なる象徴的出来事ではない。こうして先生に導かれて古代研の合宿に参加し、会員になったことが私の研究人生を実際問題として直接的に切り拓いたといっても過言ではないのだ。合宿の最中、関根賢司さんあたりに乗せられて（先生にも尻を叩かれ）、八月に開催される「物語研究会」との合同大会で研究発表するハメになった私は、二ヶ月後には散々な目に遭ったのだが、しかしそれを機縁としてさまざまな人と出会うことになった。その後も、私は古代研を主な舞台に研究をしてきたし、事務局代表などを経験しつつ組織運営を学ぶ機会も

得た。そして、会長をされていたこともある糸井通浩さんから（先生を經由して）差し出された救いの手が、私を龍谷大学の教員へと引き上げてくれた。研究人生の端緒に、その折々に、高橋先生がいて、何気なく、しかしたしかに私をよい流れのあるほうへと押し出してくださったことはまちがいない。むろん、これは自慢話である。

と、ここまで書いて紙幅も尽きた。懐かしい思い出話にはしまったばかりで、定番のネタもまだまだあるけれども、それはまた別の機会（追悼号という意味ではない——ここはかならず笑うこと）に譲ろう。